

リレー随筆

名古屋での学生生活を終えて高山へ帰郷した私は、学生時代に学んだことを活かそうと、税務関係の職へと就きました。職業柄たくさんの方々の話を聞き、お話をすることで必ず出てくる話題が後継者問題でした。

「あなたのお父さんは畳屋さんやろ。後継ぎしなくてもいいの?」。そんな会話を交わすうちに父親の後を継いで畳職人にとの思いが湧き、結婚をした年にこれが最後のチャンスと畳職人の道へと入りました。

畳職人として二十年が経過した数年前から、ある思いがずつと頭の片隅に浮かんでいました。その思いとは「熊本へ行きたい!」というものです。

なぜ熊本なのか。それは熊本が国産畳表の九五割以上を生産する、国内最大の畳表生産地だからです。実は今、国産畳表が消滅の危機にあるのではないかとも言われています。

す。生活様式の変化、安価な中国産畳表や和紙・樹脂で出来た人工畳表の台頭などで、国産畳表の市場割合は二〇割にまで低下しています。

畳表の原材料となる「草」を生産する農家さんも平成元年には五千軒以上あったものが、この三十年で五百軒を切るまでになってしまいました。「質の高い国産畳表を残したい」と思いをつなぐ」

松葉清幸(森下町一・有松葉製畳)



日没後の夜八時まで、ほぼ一か月間休みなく続きます。収穫を終えたい草は農家さんが専用の製織機で織り上げ、畳表が完成します。い草苗作りから始まり、畳表となるまで実に一年半から二年もの歳月が掛かります。

い草農家さんの下で研修を受け、酒を酌み交わしながら色々な話をしました。どの農家さんも物静かで柔らかな語り口ですが、い草作りに対するこだわりと物凄い情熱を感じます。その思いを、畳を求める一般消費者の方につなぐことこそ、私たち畳職人の役目なのではないかと思えます。

たい「もっと深く畳表のことが知りたい」という強い思いが私を熊本へと誘いました。い草作りはとても大変な農作業です。十一月下旬から十二月中旬の寒い時期にい草苗の田植えを行い、六月下旬から七月下旬の暑い時期に収穫を行います。

特に収穫作業は過酷で、作業は夜明け前の午前三時から

熊本に行くことによつて何が変わるのか。い草や畳表に対する知識を得ることとはもちろん、私の場合は畳職人としての考え方、心の持ち方がとても前向きに変わっていくのがわかります。熊本にい草がある限り、私が畳職人である限り、これからも私は熊本へ通い続けるでしょう。い草農家さんの熱い思いをつなぐために。

次回回は田中智子さん